

内水研通信

第16号

平成28年12月

千葉県水産総合研究センター
内水面水産研究所
〒285-0866 佐倉市臼井台 1390
TEL 043-461-2288
千葉県農林水産技術会議

第14回印旛沼流域環境・体験フェアに参加！



内水研ブース（開会前）

□ 印旛沼の漁業や魚介類相を紹介

平成28年10月29、30日に佐倉ふれあい広場向かいで行われた第14回印旛沼流域環境・体験フェアに参加しました。このフェアは印旛沼の水質浄化について、市民のみなさんと考えるために、県をはじめ、印旛沼流域の市町村の他、大学やNPO、企業が参加し、情報発信をするイベントです。

この度、印旛沼に隣接する内水面水産研究所は、調査を通じて印旛沼と関係が深いことから、初めてフェアに参加しました。

内水研では、当所の業務内容や印旛沼で行われている漁業を紹介するとともに、印旛沼における魚介類相調査の結果などについて発表をしました。また、発表内容と対応したクイズを実施し、回答していただいた方に内水研特製缶バッジをプレゼントしました。缶バッジのデザインにはチーバくんその他、淡水魚に親しみを持っていただくよう印旛沼にちなんだ淡水魚などを用いました。地味な魚が多いので、チーバくんしかもらえないのでは？と不安でしたが、タナゴ類の缶バッジは途中で在庫がなくなるなど淡水魚の人気も確認でき、一安心しました。



配布缶バッジ

□ 盛況！内水研ブース

内水研ブースへは10月29日に177人、30日に139人の合計316の方が足を運んでくださりました。見に来て下さった皆様、ありがとうございました。

内水研の発表を聞かれた来場者の方々は、印旛沼に多数刺さっている竹が漁具であることや平成の初めにブルーギルが漁獲物の大半を



盛況な内水研ブース

占める程多かったこと、印旛沼の魚類相が10年ほどの単位でも変化していく様に驚かれています。また、内水研の存在は知っていても、何をやっているのかは初めて知ったという方や展示室を開放していることなど知らない方も多く見られ、積極的な広報活動の重要性を改めて認識しました。

□ 高い注目度の外来生物問題

印旛沼流域環境・体験フェアが環境問題を啓発するイベントということもあり、内水研のブースにおいても外来魚の被害や外来魚が印旛沼に侵入した経緯など外来生物問題についての質問が多く、関心の高さを感じました。中には、「内水面の水産業は海に比べたら産業規模は小さいが、それでも川や湖を調査する機関があることで、こうした外来生物の問題を発見し、情報を提供してくれている。今後も頑張ってもらいたい。」というような激励の言葉もいただきました。

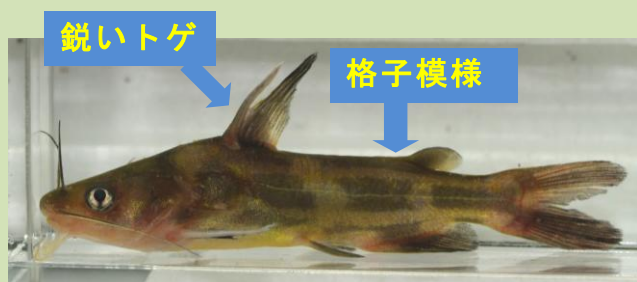
内水研の調査でも外来魚の動向に注視していますが、日々川や沼と向き合っている漁業者の方々からも外来魚に関する重要な情報が寄せられています。今後も、漁業者のみなさんに協力を頂きながら、内水面の魚介類相の変化に注目していきたいと思えます。外来生物は早期に発見し、早期に対処することが肝心です。皆様も見慣れない魚などを発見しましたら、内水研へご一報ください。

～TOPICS～

新規指定の特定外来生物「コウライギギ」と「オオタナゴ」

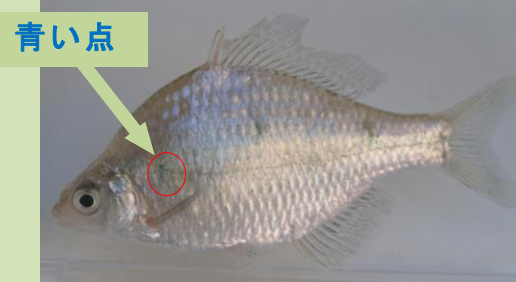
千葉県内の川や湖には様々な生き物が生息していますが、残念ながら外来生物も多く生息しています。外来生物法施行令の改正により、平成28年10月1日より、特定外来生物が新たに24種追加指定されました。特定外来生物は、**飼育したり、生きたまま移動することが規制**されています。

新たに指定された特定外来生物には、印旛沼や手賀沼において生息が確認されているコウライギギとオオタナゴが含まれていますのでこの場で紹介します。



コウライギギ

- ・ 中国大陸原産のナマズの仲間。
- ・ 20 cmくらいになる。
- ・ 体に黄色い格子模様がある。
- ・ 背ビレと胸ビレには鋭いトゲがある。
- ・ 平成24年に千葉県下での生息を確認。



オオタナゴ

- ・ 中国大陸原産のタナゴの仲間。
- ・ タナゴとしては大きく10 cmを超える。
- ・ 体の色は地味で白っぽい。
- ・ 胸鰭の上に青い点がある。
- ・ 平成20年に千葉県下での生息を確認。

全国からしじみの研究者が内水研に集結～第12回シジミ資源研究会～



満席状態の研修館

□しじみをテーマに白熱した議論!!

全国の内水面漁業において、漁獲量 1 位を占める漁業種類は何か知っていますか？

その答えは「しじみ漁業」です。

シジミ資源研究会は、しじみの研究に携わる研究者同士の、情報や意見交換、技術協力を目的として設立され、平成 16 年の第 1 回以降、年 1 回、各地で研究会を開いてきました。

第 12 回となる今年度は、千葉県での開催となり、平成 28 年 10 月 17 日（月）に、内水研の研修館にて研究会を実施しました。当日はあいにくの雨となりましたが、国や県の研究機関でしじみ研究に携わる研究者の皆様、および県内水面漁業協同組合連合会や、しじみ漁に携わる漁業者の方等、総勢 25 名が出席されました。

研究会では、各県の調査結果や震災後の環境・漁業の変化、自作の観測機器等について、6 題の研究報告がありました。各報告に対する質疑は、終始途切れることなく、予定時間を超えての熱心な議論が交わされました。

当研究所の研究者も、ヤマトシジミの生息環境の観点から、かつての一大漁場であった利根川と、平成 26 年に漁業権が免許された新たな漁場である小櫃川を比較するといった内容で報告を行いました。

また、翌日の 18 日（火）には、小櫃川の下流域にて、県内の新たなヤマトシジミ漁場の視察を実施しました。当日は、漁場の全景を確認した後、漁業者の皆様の協力の下、操業風景を見学しました。実際に漁獲されたヤマトシジミの大きさや質、また、組合長を始めとした漁業者の方々の、しじみ資源を大切にす資源保護への意識の高さとその実行力の高さに、他県の研究者の方からも感心の声が上がっていました。



実際の操業風景を見学

□しじみ資源の持続的な利用を目指して

かつて全国で 5 万トンほどあったしじみの漁獲量は、近年では 1 万トン程度に落ち込んでいます。しじみ資源が全国的に減少傾向にある中で、県内の資源の持続的な利用を推し進めていくためには、今後も継続して、漁業者の資源管理に対する取り組みを支援していく必要があります。また、今回のような他県の研究者との意見交換の場に積極的に参加し、情報の収集と共有を図っていきます。